

一般演題（口演）

第38群 看護倫理

座長:田中 いずみ(医療法人涇仁会手稲涇仁会病院)

2019年8月24日(土) 13:20 ~ 14:20 第6会場 (3F 中会議室301B)

[O38-3]大学病院に勤務する看護師が直面する倫理的問題の体験頻度と体験後のもやもや感の程度

—看護師経験年数別比較—

○西村 路子¹、江藤 由美²、越村 利恵³、江守 直美⁴、鈴木 美恵子⁵、廣瀬 泰子⁶、松浦 正子⁷、池 美保⁸、井川 順子⁹、市村 尚子¹⁰、小藤 幹恵¹¹、米道 智子¹²、秋山 智弥¹³ (1.滋賀医科大学医学部附属病院、2.三重大学医学部附属病院、3.大阪大学医学部附属病院、4.福井大学医学部地域医療推進講座、5.浜松医科大学医学部附属病院、6.岐阜大学医学部附属病院、7.日本赤十字豊田看護大学、8.大阪大学歯学附属病院、9.京都大学医学部附属病院、10.日本看護協会神戸研修センター、11.金沢大学附属病院、12.富山県看護協会、13.岩手医科大学)

キーワード：研究

【背景と目的】臨床における看護場面では常に倫理に則った看護実践が求められる。そこで大学病院に勤務する看護師が直面する倫理的問題の体験頻度と体験後に生じるわだかまりの感情をもやもや感と定義づけ、その程度を看護師経験年数別に比較しその特徴を明らかにすることを目的に調査を実施した。【方法】近畿中部地区国立大学病院に勤務する看護師690名を対象に、属性及びEIS日本語版【32項目】にある倫理的問題の各場面に対して、過去1年間の体験頻度と体験後のもやもや感の程度を調査した。分析は、倫理的問題の体験頻度、及び体験後のもやもや感の程度について看護師経験年数別比較は一元配置分散分析、経験年数の影響は重回帰分析を行い、有意水準を5%以下とした。【倫理的配慮】A大学倫理委員会の承認を受け実施した。質問紙は無記名とし研究同意欄を設け回答は個別郵送で回収した。【結果・考察】有効回答337名(回答率48.8%)であった。倫理的場面の体験頻度では「15.非倫理的、能力が低い等の同僚と働くこと」($p=0.0245$)、「20.安全確保の身体抑制や薬剤による鎮静」($p=0.0256$)、「25.患者の権利と尊厳の尊重」($p=0.0343$)、体験後のもやもや感では「11.医療資源の公平な配分」($p=0.0089$)、「15.非倫理的、能力が低い等の同僚と働くこと」($p=0.0169$)で看護師経験年数群間に有意差があった。「15.非倫理的、能力が低い等の同僚と働くこと」では、経験5年～10年未満が体験頻度(平均得点1.44)、もやもや感(平均得点2.68)ともに最も高く、教育的な役割を担う年代で、非倫理的行動をとる看護師に対する感受性の高さが伺えた。「20.身体抑制」の体験頻度は経験20年以上(平均得点1.36)が最も低く、20年前からの厚生労働省の身体抑制への取り組みにより、倫理的問題として捉えにくいのではないかと考える。また「3.延命処置を継続か、中止か」において、看護師経験年数が短いほど体験頻度は高く、有意に影響があった。「15.非倫理的、能力が低い、不適切な行動をとる等の同僚と働くこと」、「24.過剰、不十分な処置や検査の指示」の2場面で臨床経験年数が短いほどもやもや感は強く、有意に影響していた。【結語】大学病院の看護師は様々な倫理的問題に直面し、もやもや感を抱いており、経験年数による特徴が明らかになった。